自閉症スペクトラム特性は対話型テキストの理解を阻害するか

○東城 立憲・藤木 大介
(広島大学大学院人間社会科学研究科)

通常の学級おける発達障害の可能性のある児童は 6.5%に及び（文部科学省, 2012），増加傾向にある（発達障害教育センター, 2020）。中でも社会的コミュニケーションの困難と強いこだわりにより規定される自閉症スペクトラム障害（ASD）は見えづらい発達障害である。潜在的に障害特性を持つ子どもを支援の対象に据える必要性は高い。

ASD 者の学習上の特徴に，定型発達者よりも文章読解後の推論課題の成績が低いことがある（Nation, Clarke, Wright & Williams, 2006）。Kintsch（1994）に基づくと，推論課題に正答するには内容の記憶表象であるテキストベースが既有知識と結び付けられている状態を指す状況モデルの構築が必要とされる。そのため，状況モデルの構築を促す工夫が文章に取り入れられることがある。

対話型テキストはその工夫の 1 つである。専門家と学習者の会話形式で進む特徴を持ち，特に初学者を読者に想定する書籍に採用される。比留間（1996）は読み手が登場人物の反応を基に各文の重要度評定をしていることを示し，発話理解で用いる認知資源を読解に割くことができる可能性を示唆した。一方で，登場人物の反応を読解に利用するためには自他の心的状態を理解，説明したりする能力である「心の理論」を必要とする可能性がある。別府・野村 （2005）は，定型発達児はこの能力を直感的に使用するが ASD 児は言語を媒介とした認知機能が必要となる可能性を示した。この場合，ASD 者にとっては対話型テキストは読解に処理資源を要し，かえって状況モデルの構築が阻害される可能性がある。

方法

参加者 広島大学の大学生，大学院生 32 名（平均年齢, 21.9 歳）であった。今後 60 名をめどに追加実施予定である。

材料 深谷（2011）が用いた循環系に関する説明文を基本型文章とした。またこれを藤木・田中（2020）が博士と学生との会話に改めたものを対話型文章とした。加えて，両文章に共通の記憶課題，推論課題を用いた。ASD 特性の測定は成人用 AQ 日本語版（若林, 2016）を使用した。

手続き 実験は個別に実施された。参加者はいずれかの文章を読解（12 分）後，記憶課題，推論課題に取り組み（25 分），AQ に回答した。

結果と考察

参加者の AQ の平均は 19.7（SD = 5.16）であった。これを基準に高群（基本型 N = 7, 対話型 N = 7），低群（N = 8, N = 10）に分けた（Figure 1）。文章の種別，AQ 高低を独立変数，各課題得点を従属変数として被験者間二要因分散分析を行った。その結果，記憶課題には有意差はみられなかったが，推論課題において文章と AQ の交互作用（F (1, 28) = 4.42, p = .045, η^2 = .136）がみられた。下位検定の結果，基本型群においては AQ の単純主効果が有意であり（F (1, 28) = 5.10, p = .032, η^2 = .282）。また AQ 高群においては文章の単純主効果が有意であった（F (1, 28) = 5.00, p = .034, η^2 = .294）。

基本型文章における AQ 高群の推論課題成績が低いことは Nation et al.（2006）に一致し，ASD 傾向の高い者は文章の状況モデルの構築が困難であるといえる。一方，予測と異なり AQ 高群は基本型文章よりも対話型文章の推論課題成績が高かった。McNamara, Kintsch, Songer, & Kintsch（1996）は読み手が文章の内容に関する既有知識を持つとき，文の繋がりが悪い文章の方が理解課題の成績が高くなることを示している。つまり読解に負荷がかかる場合にかえって深い処理になることがあるといえる。このことから，ASD特性は対話形式を読みづらくするが，そのことにより状況モデルの構築が促進され，推論課題の成績の向上につながった可能性がある。

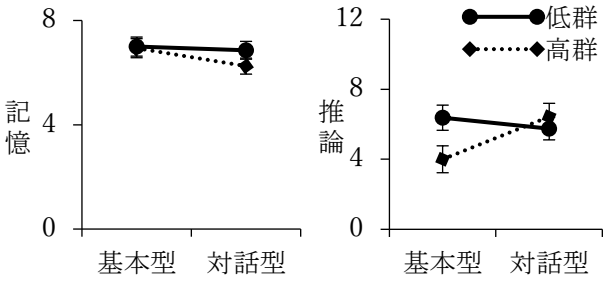

Figure 1
群間における課題得点（エラーバーは標準誤差）